

今治・NPO法人「能島の里」

大島石で加工品開発

高級石材「大島石」の産地、今治市宮窪町で主力商品の墓石以外の加工品開発に、地元NPO法人「能島の里」(村上安直理事長)が取り組んでいる。地域活性化と産地支援の一環で大島石を使ったテーブルや陶器を商品化し、販売促進に向け準備を進めている。

能島の里は、急潮が取進する団体。2011年り巻く同町沖の村上水軍には、市が旧自治体単位の城跡能島と周辺の景観で設置する地域活性化推進協議会に採石場見学な「潮流美術館」構想を推し進め、これをメニューにした「石

大島石の粉をうわぐすりに用いた「能島焼き」



テーブルや陶器 商品化 体験ツアーで魅力発信

**経済
えひめ流**

文化体験ツアー「実施を提案し、昨年1月の事業開始後は運営を担う。大島石は採掘しても墓石に使えるのは1割程度にとどまる。墓石に使用しない石の有効活用策を模索していた能島の里は、07年に観光名所カレイ山展望公園で営業を開始したカフェに大島石のテーブルを設置。公園を起点とする体験ツアーが始まると「購入できるのかな」などの問い合わせが相次ぎ、昨春秋に商品化を決めた。標準サイズは横120×57、縦70、厚さ4・5

寸、約1000円で、価格以上かけて、コバルトやジ(HP)を開設し、テは25万円(送料別)。墓ミネラルなどの石の成分ブルーや能島焼きの販促石では敬遠される黒や白からにじみ出る青色のうを強化する予定。事務局の色が入った「なで」とわぐすり開発に成功したの村上利雄さん(65)は呼ばれる石もテーブルなという。「ツアーの実現で徐々に模様として生かすこと陶器は潮流のイメージ大島石への関心が高まっができる。とも重なることから「能島焼き」と命名した。小級。いろんな手法で魅力陶器を製作するのは今治市出身の陶芸家川戸直樹さん(61)と神奈川県鎌倉市。川戸さんは、2年前は400〜2千円。能島昨年末には大島石協同前に能島の里会員の案内の里がカフェで販売して組合が大島石を地域団体で採石場見学したのをきいて。川戸さんは「オブ商標に登録している。産つかけに大島石の活用研ジェ製作も研究中。大島地活性化に弾みをつけるを始めた。土に石を交石振興の一助になりたる、地域を挙げた活動のせたり、石材加工時に出い」と話す。成果が期待できそうだ。(江頭謙)

能島の里は2月中旬にもつたりと試行錯誤。1年通信販売用のホームページ



NPO法人能島の里が商品化したテーブル